
未来予知サイト

桜泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来予知サイト

【Nコード】

N1389M

【作者名】

桜泉

【あらすじ】

みなさんは自分の未来を知りたいと思っただことはありませんか？明日何が起こるのか知ることができたらなあ。

そう思ったことは誰にだってあるはずです。

そんな、未来を予知するサイト「未来予知サイト」を知ってしまった主人公（蒼井 修）は自分の未来を変えていつてしまいます。

しかし、そのサイトを使っていくうちに・・・

恐怖と勇気の感動ミステリー？

転校生

ピピピ…ピピピ…。

窓からそつと光が差す静かな朝に目覚まし時計がなる。蒼井^{あおい}修^{しゅう}はそれを無意識に止めると、再び暖かい布団の中にもぐりこんだ。

7時30分。

「修、朝よ！ 早く起きなさい！ もう遅刻するわよ！」

意識がだんだん戻ってきた修は叫ぶ女性の声が聞こえた。母だ。

（そうだ！ 今何時だ?!）

急いでに時計を目をやる。

7時31分。

（やばい！ 早く起きないと!）

修はベッドから飛び出して自分の部屋をでた。

「おはよう」

目をこすりながら父の弁当を用意する母にいう。

「おはよう。まったく毎日叫ばないとおきないんだから。もっと自分でおきれるようにしなさいよ」

朝から母にいわれるとなんだかむかむかするが、自分が悪いのでだまって顔を洗いにいく。そしてマーガリンを塗った半焼けのパンを口にしながら制服に着替える。

慌しく準備を終えると、バッグを用意して家から飛び出した。

「いつてきます！」

修の通う中学校は家から15分程度あるいたところにある。開校してから50年近く経つが、校舎は立派なもので歴史と時間の雰囲気が漂う。

修が自分の教室に入るとクラスメイトはほぼ席についていた。先生はまだ来ていないらしい。

修の席は一番後ろの右端なので教室の後ろから入って席に着いた。
ちなみに修は中3だ。

「おはよう、恭介」

修は前の席の友達 恭介 に話しかけた。

「やあ、またギリギリだね」

恭介が目のない笑顔で言った。恭介は目が細く、笑うと目がなくなる。背は修と同じくらいでいつも修と話している親友だ。しかも優しく穏やかな性格なのでみんなと仲がよい。

「うるせーな。てかさ、転校生が来るって本当か？」

「うん、本当らしいよ。しかも可愛い女子なんだってさ！」

「なーんだ。女子かよ」

修と恭介は最近耳にした、今日この学校に来る転校生について話していた。

「あれ、興味ないの？」

恭介が探るように言う。

「別にー」

「本当は気になってるんでしょ」

「な、なんでだよ。お前の方が気になってるんじゃないのか」

修は心のうちを読まれたような気がして焦る。

「僕はほら、修みたいにいケメンじゃないからさ」

「な、なんだよお前。もっと自分に自信もたなきゃやっていけねえぞ！」

修は頭こそ良いわけではないが顔は学年1を争うくらいのイケメンだ。当の本人はあまり女子には興味なく告白されてもすぐ振ってしまうという珍しい男だ。

そう話しているうちに担任が教室にきた。

「さあみんな聞け。突然だが今日から新しい仲間がまた1人増える。仲良くしてやってくれ。」

じゃあ、入って」

きびきびとした口調で先生がそう言い終わると、教室の外で待つて

いた転校生が教室に入って来た。

修は心底新しい仲間を楽しみにしていた。

転校生は教室に入ると、黒板の中央でみんなに顔を見せて言った。

「はじめまして、今日からこのクラスに新しく入る長沢 ながさわ 可憐 かれん です。よろしく願います」

とても品のある口調でそういうと、不安ながらも礼をした。

すると他のみんなは拍手をおくり歓声をあげた。

そう、彼女はとても可愛らしく、美しさを兼ねそろえた美貌であった。特に目はとてもくつきりしていて印象的だ。また髪は肩にかかるくらいで、黒髪がよく似合う少女だった。しかし、日本人の特徴とは少し違う不思議な雰囲気を持っていた。

「じゃあその席を用意しておいたから、とりあえず座って話を聞いてくれ」

担任がそういつて指を刺したのは修の後ろにあった空席の机だった。

（もしかとは思っていたが本当にこの席にくるとは！）

そうして可憐は後ろの席へ歩きだした。

修はすでに心を打たれていた。今まで感じたことのない、繊細な気持ちが生まれた瞬間であった。

そして修が歩いてくる可憐に目をやっていると、可憐は吸い込むような目で修を捉えた。

一瞬目があつた2人は恥ずかしそうに目をそらした。

可憐が席に座ると担任が話を始めた。が、修の耳にはなにも入ってはいなかった。

転校生（後書き）

はじめまして。桜泉です。

これから頑張って小説を書いていきたいと思います！

いつもの自分にはないアイディアを出していこうと思っていますので、

話の展開やイメージが変に感じることもあるとおもいますが、読んで感想をいただけたら幸いです。

またストーリーだけでなく、読みきったときにはこの小説の主要も理解していただけたらいいなと思います。よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1389m/>

未来予知サイト

2010年10月15日18時24分発行